

亀戸ダイコン

江戸後期には亀戸で栽培され、肌がきめ細かいことから「おたふく」「おかめ」と呼ばれていたが、明治に産地が中川を遡り、亀戸を離れ「亀戸ダイコン」と呼ばれるようになった。その後、葉の主脈（中肋）が白いものが「白茎亀戸」として選抜され、今日に至っている。

白首ダイコンで根身は小型の円錐形で肩が張り、尻がとがり根長は25 cm程である。皮は白く肉質は緻密で食味が良く、煮食にも用いられるが、主に葉と共に浅漬けにして利用される。耐暑性、耐寒性は共に低く、根径40 mm以上になるとス入り、空洞、裂開が生じやすくなるので適期収穫を励行する。



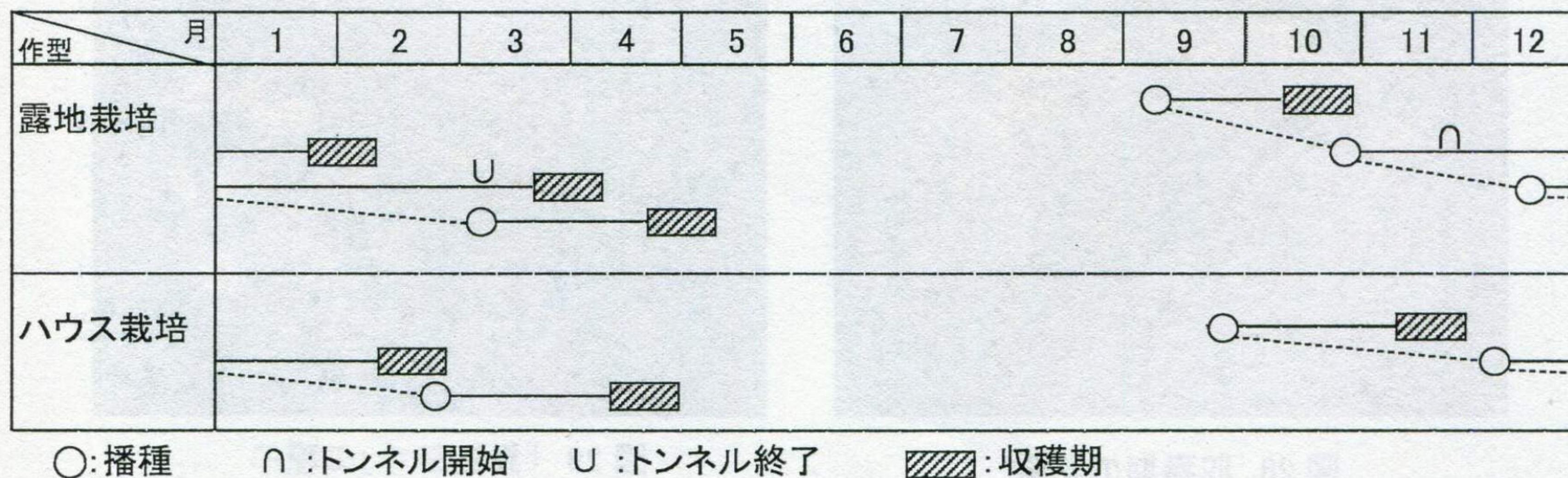
1. 作型

「亀戸ダイコン」は根部の肥大が比較的早く抽苔は遅いが、5月になるとス入りや空洞が発生しやすいため、5月上旬までに収穫する（表7）。また、抽根性は“無”（吸込型）から“やや少”（抽根指数30%）とばらつきがみられ、冬季の降霜時に地表から出た肩の部分に凍害が生じる。

露地栽培では9月上旬～3月上旬に播種し、10月下旬～5月上旬に収穫できるが、冬季は凍害を受けるため、11月下旬～3月上旬はベタロンやユーラック等によるトンネル被覆またはパオパオ等によるべた掛けが必要となる。

ハウス栽培では9月下旬から2月上旬までに播種し、11月下旬～4月下旬収穫となる。

表7 「亀戸ダイコン」の作型（江戸川地域）



2. 施肥管理

生育期間が短いため、一般に施肥は基肥だけで追肥は行わない（表8）。特にマルチ栽培の場合は全量基肥とする。堆肥は、岐根の原因となるので、前作に入れておき、未熟堆肥は投入しない。土壌が酸性の場合は苦土石灰等を施用し、pH 5.5～6.8に矯正する。火山灰土壌などリン酸吸収係数の高い土壌ではリン酸が不足しないように改良する。

表8 「亀戸ダイコン」の施肥例(10a当たり)

肥料		施肥量 (kg)	成分量(kg)		
			窒素	リン酸	カリ
基肥	化成888	125	10.0	10.0	10.0
	硫安(21%)	19	4.0		
合計			14.0	10.0	10.0

施用上の留意事項

- ① 堆肥は前作に十分施用する。
- ② 前作に肥料が残っている場合には施肥量を減ずる。
- ③ 施設栽培の場合は施肥量を減ずる。

3. 栽培管理

(1) 播種

前作がアブラナ科でなく、耕土が深く膨軟で排水の良い圃場が良い。深耕し、表土はロータリーで十分碎土する。また、キスジノミハムシやネキリムシの食害を防ぐため、薬剤を施用する。

播種法としては、手播きによる点播と手押し播種機（クリーンシーダ、ごんべえ）を使用した条播がある。

点播では、1 箇所3粒ほど播種し、覆土する。本葉3～5枚展葉時に、間引きを行い、株間15 cmになるようにする。マルチの使用は、土壌の跳ね上げ防止、雑草対策、地温の保温等に効果がある（図30）。

条播では、条間を12～15 cmとし、点播と同様に間引きを行う（図31）。

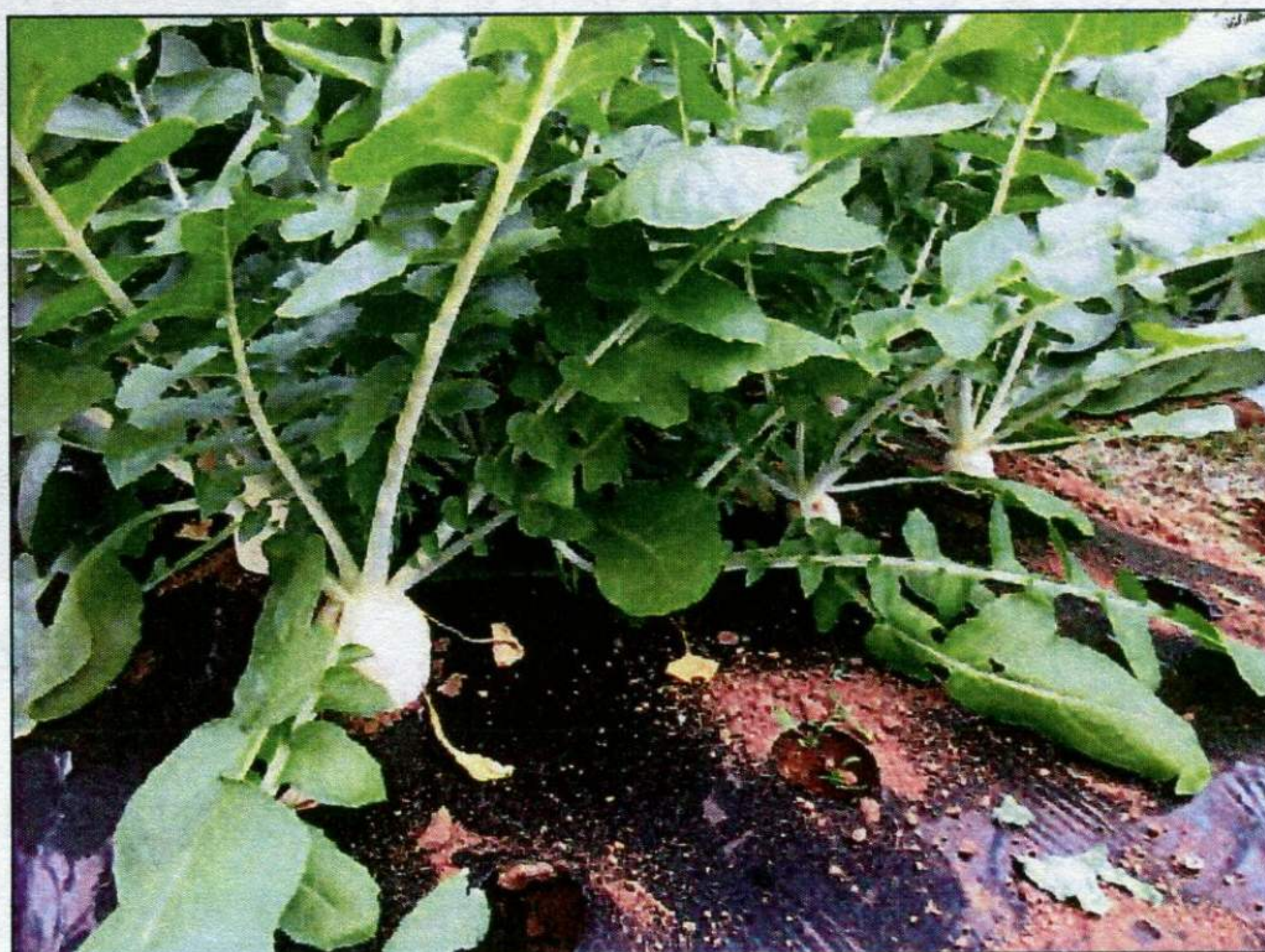


図30 黒マルチを使用した点播



図 31 クリーンシーダによる条播（露地とハウス）

（2）播種後の管理

露地栽培では、台風、豪雨、低温および害虫に備え、べた掛けまたはトンネルを行うことが望ましい。10 月以降の播種では、凍害の恐れがあるため、ベタロンやユーラックによるトンネル被覆が必要となる。冬～早春には鳥（ヒヨドリ）による食害がみられるため、注意する。

4. 収穫方法

露地栽培での収穫期は、9 月上旬播種は 45 日、12 月播種は 100 日、3 月上旬播種は 60 日を目安にする。ハウス栽培では、9 月下旬播種は 50 日、12 月播種で 80 日を目安にする。

肥大にはばらつきがみられ、収穫期前 20 日ごろから急速に肥大する。このため根径が 4 cm ほど（ゴルフボールほど）に達したもののから順次間引き収穫を行う（図 32）。また、吸込型の株については、根部の太さを確認して収穫する。

株重は作型により異なるが 250～300 g で、根重は 150 g 程である。可販率も栽培時期により異なるが、冬季は 8 割ほどになる。10 a 当たりの目標収量は株重で 6 t である。

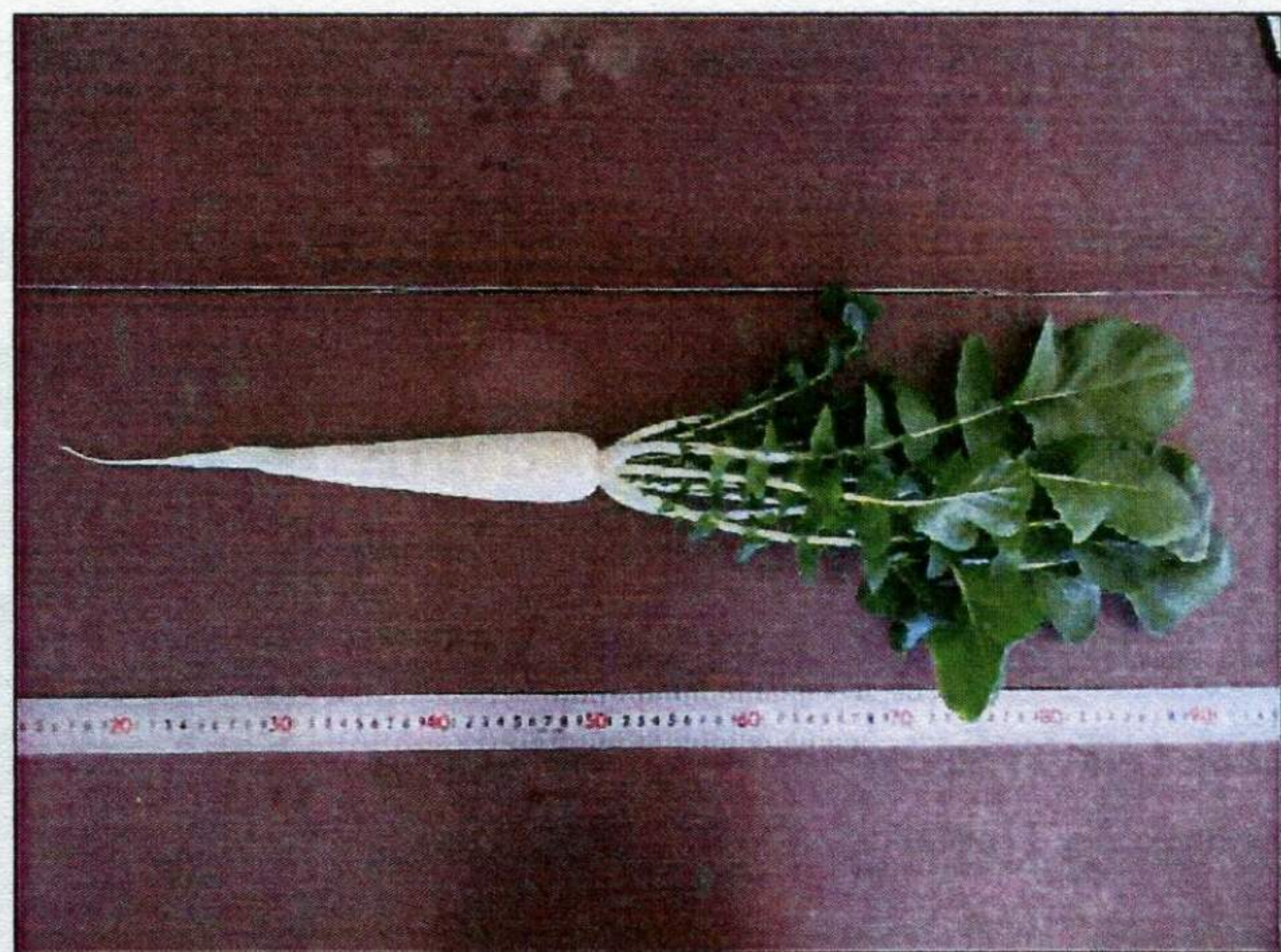


図 32 収穫時の「亀戸ダイコン」

「亀戸ダイコン」は近年の品種と比べると、ス入り、空洞症、岐根、内部褐変症が発生しやすい。

ス入り：通常、収穫が遅れた場合に発生する（図 33）。「亀戸ダイコン」では根径 4 cm ほどから見られ始める。一般には生育後期に気温が高い場合、株間が広い場合、窒素・カリ肥料が多い場合、軽い土の場合などでも起きやすい。

空洞症：尻部から中心部に空洞が入るもので、高温時および肥大初期～中期で生育が停滞した場合に発生しやすい。

裂根：生育後期の水分過多（急な肥大）で起きやすい。

岐根（又根）：根の生長点が枯死すると、側根が肥大して岐根となる。生育初期の過湿、虫害、および堆肥や化成肥料に根が触れた場合に起きる。

内部褐変症：赤心症、黒心症と呼ばれるが、「亀戸ダイコン」は比較的発生しやすい。生育後期の高温で発生しやすい。



図 33 ス入り

5. 病虫害防除

一般のダイコン品種と同様に病虫害防除指針に沿って、防除する。

害虫としては、キスジノミハムシ、カブラハバチ、ハイマダラノメイガ、コナガ、ヨトウムシ・ネキリムシ類、アオムシ・オオタバコガ、アブラムシ類が発生する。播種時の粒剤施用やベタがけ、および防虫ネットや薬散により防除する。ネグサレセンチュウによる被害を避けるために、輪作や土壌消毒を行う。

病害では、白さび病には比較的弱く、亀裂褐変症、根くびれ病も発生するため、圃場の過湿、排水に注意する。

病虫害については、早期発見、早期防除、発病株処分を徹底する。